

氏名	香川洋平
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博甲第 5433 号
学位授与の日付	平成 28 年 1 月 27 日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科機能再生・再建科学専攻 (学位規則第 4 条第 1 項該当)

学位論文題目	Acetabular development after open reduction to treat dislocation of the hip after walking age (歩行開始後の股関節脱臼例に対する観血的整復術後の臼蓋形成)
--------	---

論文審査委員	教授 木股敬裕 教授 金澤右准教授 西田圭一郎
--------	-------------------------

学位論文内容の要旨

わが国ではいわゆる先天性股関節脱臼は激減しており、歩行開始後に発見される診断遅延例は稀である。しかし、歩行開始後に診断された股関節完全脱臼例の治療は難渋する。その理由として、整復が容易ではないこと、征服後に臼蓋形成が不十分で骨盤骨切り術の併用や追加を要することが挙げられる。

当院では 1974 年より、広範囲展開法（田邊法）をオリジナルの観血的整復術（OR）式として行ってきた。現在ではわが国で代表的手術法の一つとして認識されるようになった。我々の施設では多施設に比べて追加手術を行うことが少なく、OR 単独治療での純粋な臼蓋形成の経過を評価することが可能である。当院で OR のみを行った歩行開始後未治療の股関節完全脱臼 38 例 43 股の 6 歳までの臼蓋形成について検討した。臼蓋形成の予測因子を評価するために、6 歳時の acetabular index (AI) $\leq 35^\circ$ かつ centre-edge angle (CE-A) $> 5^\circ$ を良好群として検討した。

AI は術後経時的に改善していた。骨頭核横径は術後 1 年で健側と同等になり、その後 CE-A が改善していた。良好群と不良群とを比較検討すると、術後 1 年時の CE-A がその後の臼蓋形成に関係しており、カットオフ値は -2° であった。

本研究結果から術後 1 年で骨頭径が健側と同等になることにより関節適合性が改善し、臼蓋形成が促進されることが推察された。術後 1 年時の CE-A がその後の臼蓋形成を予測する因子であると考えられた。

論文審査結果の要旨

先天性股関節脱臼は、歩行開始後に診断されてからの治療は難しいとされている。岡大では、これらの症例に対して 1974 年より田邊法によるオリジナルの観血的整復術を施行し良好な結果を得てきた。本研究は、田邊法による手術結果を画像的に解析し、適切な手術時期ならびに臼蓋形成に及ぶ因子を明らかにすることである。

保存的治療はせず、田邊法のみ施行し術後経過が解析可能な 43 例を詳細に分析した。その結果、低年齢手術で良好な結果が得られる傾向があること、またレントゲンでの CE 角が臼蓋形成に影響を及ぼす因子を明らかにした。今後の早期発見と早期治療の必要性を示唆する重要な研究成果だと思われる。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。